

旅のことばの活用支援

金子 智紀^{*1}, 岡田 誠^{*2,3}, 井庭 崇^{*4}

*1 慶應義塾大学 環境情報学部

*2 一般社団法人認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ

*3 株式会社富士通研究所

*4 慶應義塾大学 総合政策学部

Abstract

本論文では、医療・福祉現場や学校、地域のカフェやサロン、行政主催の勉強会など、さまざまな場で利用されはじめている『旅のことば: 認知症とともによりよく生きるためのヒント』というパターン・ランゲージが、さらに多くの現場で広く用いられるための支援について述べる。「旅のことば」とは、認知症であっても前向きに暮らしている人たちの生活のコツを 40 のことばにまとめたものである。本論文では、これまでに行なってきた支援内容を紹介するとともに、支援内容を以下の 3 つの要素: 「活用者のナラティブを集める」、「活用シーンを増やす」、「ピアサポートのコミュニティをつくる」に分類した。

1. はじめに

認知症は、誰にとっても身近な事柄である。日本における認知症の当事者の人数は、軽度認知障害（MCI: Mild Cognitive Impairment）を含めると、約 800 万人いると推計されている。これは、65 歳以上の約 4 人に 1 人、日本人全体でみると約 15 人に 1 人という計算になる（厚生労働省, 2015）。認知症の当事者の方の暮らしをみると、その多くは病院や施設で暮らすのではなく、地域の中で暮らしている。医療技術の進歩により早期診断が可能となっている一方、認知症に対するネガティブなイメージから、早期絶望につながってしまっている。実際に、認知症になることで、これからどうなるのかわからないという不安に押しつぶされそうになり、外出や交流の機会が減ってしまっているという現状がある（国際大学 グローバルコミュニケーション・センター & 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ, 2015）。

他方、認知症の当事者や家族の中には、認知症とともにによりよく生きている人も多く存在する。その人たちは何か特別なことをしているのではなく、ちょっとした工夫をすることで認知症とともにによりよく生きている（中村, 2011; 佐藤, 2014; 樋口, 2015; 丹野, 2017; 大城, 2017）。そのような人たちが持つ、前向きな考え方や工夫を共有することで、多くの人たちを支援できるのではないのだろうかと考えた。

そのような背景のもと、対象領域における経験知や実践知を言語化する手法であるパターン・ランゲージ（Alexander, et al., 1977; 井庭, 他., 2013）を用いて、『旅のことば: 旅のことば: 認知症とともにによりよく生きるためのヒント』（井庭 & 岡田, 2015）を作成した。「旅のことば」では、「認知症とともにによりよく生きる」ことを、ひとつの「新しい旅」として捉え、「本人」、「家族」、「みんな」の3つの視点から、前向きで実践的な工夫を記述している。その「旅のことば」を活用することで、認知症にやさしい社会の実現に近づくのではないのかと、医療・福祉現場や学校、地域のカフェやサロン、行政主催の勉強会など、さまざまな場での活用がされ始めている（Kaneko & Iba, 2017）。

本論文では、「旅のことば」がさらに多くの現場で広く用いられるための支援について探っていくために、これまでに行なってきた支援内容の整理・分析を行なう。そして、そこから活用の支援における要素を明らかにしていくとともに、今後の活動について検討していく。

2. 旅のことばプロジェクト

『旅のことば: 認知症とともにによりよく生きるためのヒント』は、2014年6月にスタートした慶應義塾大学井庭崇研究室と一般社団法人認知症フレンドリージャパン・イニシアチブの共同研究プロジェクトの成果である。医療・福祉の専門家ではないメンバーでチームを組み、認知症であっても前向きに生きている方々からお話を伺い、認知症とともにによりよく生きるとはどういうことか、井庭崇研究室でパターン・ランゲージの作成プロセス：マイニング、ライティング、シンボライジング（井庭, 他., 2015; Iba & Isaku, 2016）で40のことばにまとめた。

作成後、医療・福祉現場に留まらず、さまざまな場で活用されは始めている。図2は、自身の活動や報告があった計139回の活用データから作成したもので、「旅のことば」の活用が実際にどのように広がっているのか可視化したものである。データを整理する上で、「旅の

ことばメンバーによる実施」、「旅のことばメンバーのサポートによる実施」、「旅のことばの作成メンバーの支援によらない実施」の3つのグループに分類し、それぞれにおいて何回活用されてきたかを表したものである。

これらの活用の広がり、これまで行なってきた支援活動の結果である。次の章では、それぞれの支援内容に関して紹介しながら、さらに多くの現場で広く用いられるための支援について検討していく。

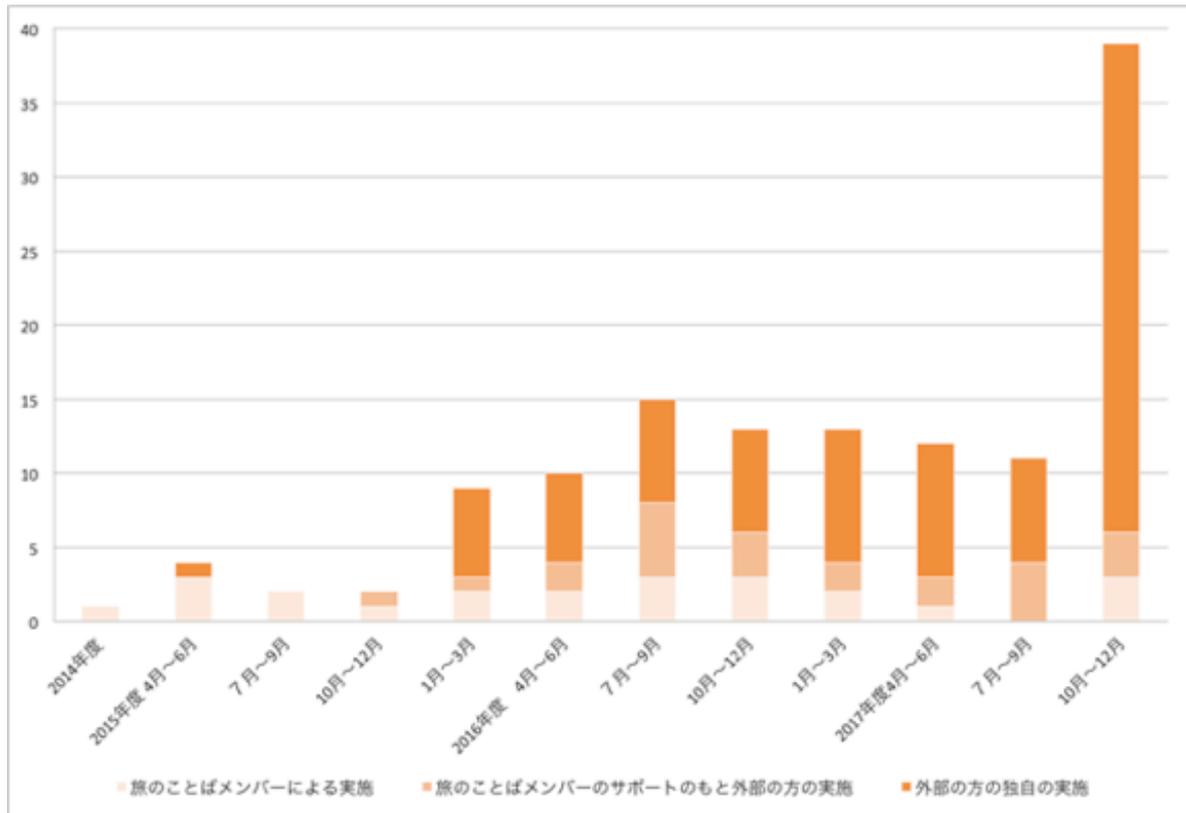


図 1: 旅のことばの活用の広がり

3. 旅のことばプロジェクト整理・分析

まず、「旅のことば」を活用する上で必要な支援方法を探るために、これまでのプロジェクト活動の整理を行う。時系列ではなく、活用の支援という観点で整理するために、3つのフェーズ「フェーズ1：プロモーション活動」、「フェーズ2：作成メンバーによる実践・普及」、「フェーズ3：自主的な活用のきっかけづくり」に分類して考えていく（図3）。このフェーズは、創造的な学びを支援するパターン・ランゲージである『ラーニング・パターン』（Iba & Iba Lab, 2014）や企画のコツをまとめた『プロジェクト・デザイン・パターン』（井庭崇 & 梶原文生, 2016）の活用の支援、Geoffrey A. Moore が考案した、新たな製品が市場でどのように受け入れられていくかを理解するためのモデルである、テクノロジー・ライフサイクル（Moore, 1991）などからヒントを得ている。

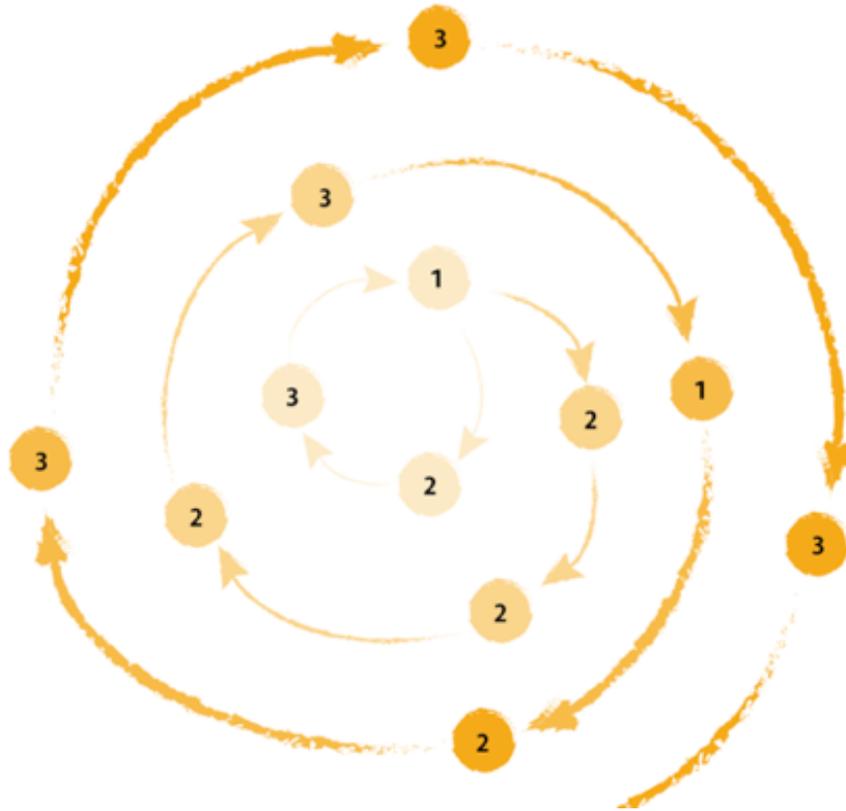


図2: 「旅のことば」の広がりフェーズ

3.1. フェーズ1: プロモーション活動

フェーズ1はプロモーション活動である。メディアへのプレスリリースや講演活動、執筆、学会発表、「旅のことば」に関連するコンテンツの作成など、さまざまな場で「旅のことば」やその活用法を知ってもらうための情報発信を行ってきた。

フェーズ1において、出版ということは、より多くの人たちに知ってもらうきっかけになった。最初は「冊子を読んで自身の実践に取り入れる」という活用がほとんどであったが、作成メンバーや新しい考え方を早い段階で取り入れる「アーリーアダプター」の人たちによって活用の方法が徐々につくられていった。その活用法をイベントや講演会、SNSなどで取り上げ、どのように活用できるのかを知ってもらうきっかけをつくってきた。

その他、国内外の人たちの手にとってもらうために、英語で『*Words for a Journey: The Art of Being with Dementia*』(Iba et al., 2015)、中国語で『*旅程的關鍵字：與認知障礙症共存的啟示*』(井庭崇 & 岡田誠, 2017)の出版・発表も行った(図3)。また、ワークショップ等での活用しやすいように、カード版も作成した。日本語の書籍・カードに関しては、グッドデザイン賞 2015 受賞、認知症フレンドリーアワード 2015 大賞受賞、川崎基準の認定を受けるなど、さまざまな場で評価を受けることで、「アーリーアダプター」に知ってもらうきっかけになった。

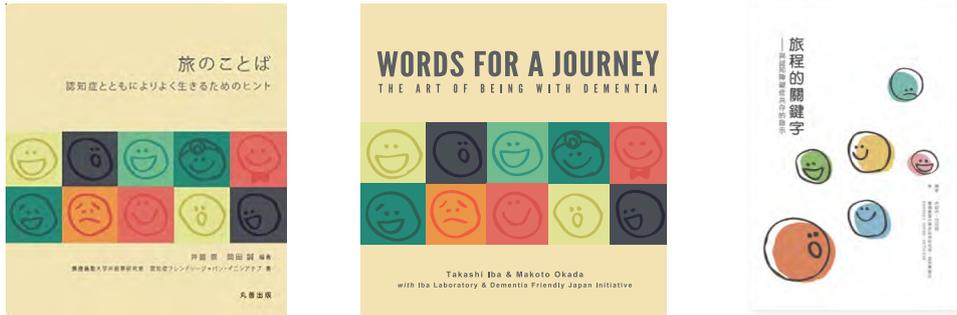


図3: 『旅のことば 認知症とともによりよく生きるためのヒント』

3.2. 作成メンバーによる実践・普及

フェーズ2では、「旅のことば」をより多くの人たちに活用してもらうために、作成メンバーによる活用方法の開発、活用のサポートなどを行ってきた。最初は、フェーズ2のみを考え作成メンバー中心に活動していたが、次第にフェーズ3を意識しながら自主的な開催が可能となるための下地づくりを行ってきた。

フェーズ1での活動の結果、活用方法を教えて欲しいという声があり、彼らの活用をサポートするために「旅のことばの使い方・活用セミナー」を開催した(図5左)。これまで合計10回開催し、その参加メンバーは、現在、町田市でスターバックスとコラボした「Dカフェ」を毎月8回開催、定期的に地域向けに「旅のことば」を活用したセミナーを開催するなどし、その成果をあげている。



図4: 旅のことばの使い方・活用セミナーの様子

新しい考え方を早い段階で取り入れることが可能な「イノベーター」や「アーリーアダプター」たちにとっては、「旅のことば」を自身の活動やサービスに取り入れることが可能であるが、彼らのような存在は多くなく、より多くの人に活用してもらうためには、有効な先行事例が必要であった。そのため、よりよい活用法の開発に向けて、2016年に「旅のことばを探る旅プロジェクト」を実施した(図6)。このプロジェクトでは、全国を旅しながら自らさまざまなシチュエーションで「旅のことば」を活用するとともに、すでに「旅のこと

ば」を活用している人たちにどのように活用しているのかインタビューを実施した。その結果、42 都道県の 127 名から、よりよく「旅のことば」を活用するためのコツを抽出し、「パターン活用パターン」(Kaneko & Iba, 2017)を作成した(※パターン活用パターンは付録1で紹介する)。このパターンを用いて、これから活用したいという人たちや「旅のことば」を始めて知った人たちにパターン・コンシェルジュ (Mori *et al.*, 2016)を実施した。



図 5: 旅のことばを探す旅プロジェクトで出会った人たち

3.3. 自主的な活用のきっかけづくり

フェーズ3では、「旅のことば」の活用シーンに触れる機会を増やし、フェーズ1やフェーズ2で「旅のことば」の活用方法を知った「アーリーマジョリティ」の人たちが活用するためのきっかけづくりを行った。

また、活用のサポートとして、「旅のことば」に関する相談やお互いの活用方法を共有するための活用コミュニティ「旅のことばをみんなで使おう!」を Facebook 上で作成した。現在約 550 人のコミュニティになっている(図5右)。



図 6: 活用コミュニティ「旅のことばをみんなで使おう！」

フェーズ2で実施された「イノベーター」や「アーリーアダプター」の人たちの活用や自分たちの活用内容を「旅のことばをみんなで使おう！」でシェアした結果、そこから活用方法を学びあったり、活用方法を zoom というオンライン通話サービスを用いて教え合ったりということが起き始めた。「旅のことばをみんなで使おう！」は、フェーズ3のさまざまな活動が投稿され始めることで、初めてコミュニティとして出来上がったと言える。

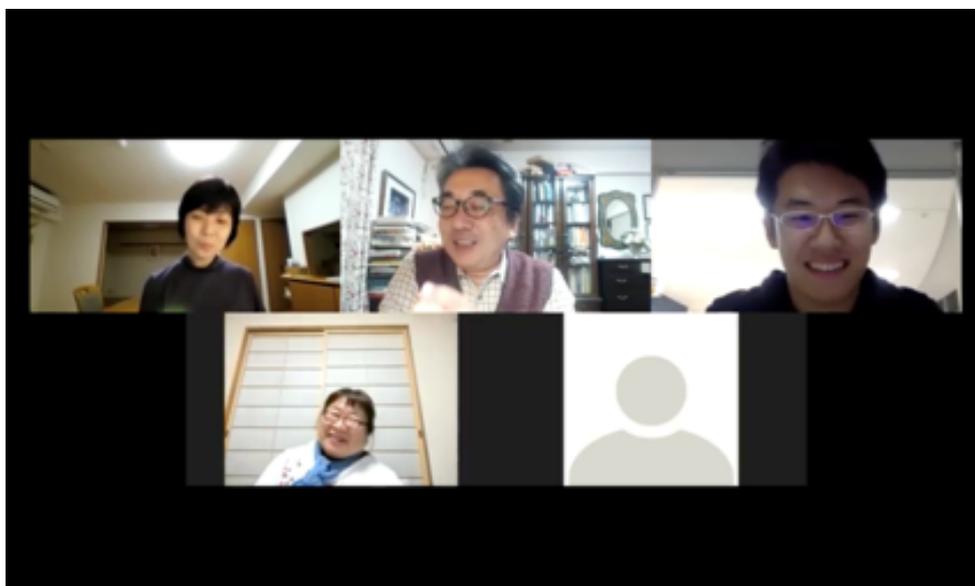


図 7: オンライン通話サービス zoom での活用相談会の様子

その他、「旅のことば」に触れる機会を増やすため、作成者以外の「旅のことば」の取り組みのサポートを行った。例えば、川崎市市の「認知症アクションガイドブック（川崎市認知症ケアパス）」では「旅のことば」のパターンやイラストをアレンジして、認知症とともに

よりよく生きることを、人生の「新しい旅」と捉え、前向きに生活していくためのガイドブックとなっている。(図 11 上)。また、RUN 伴という認知症の人や家族、支援者、一般の人がリレーをしながら、一つのタスキをつなぎゴールを目指すイベント (Ide, 2016) では、参加賞としての「旅のことは」カード配布や、応援グッズとして「旅のことは」のパターンオブジェクトの作成のサポートをした (図 11 下)。



図 8: 全国各地の「旅のことは」を用いたさまざまな取り組み

4. 活用支援の分類・考察

次に、「旅のことは」を活用する上で有効な支援方法を探るために、3章で整理したこれまでのプロジェクト活動による活動のクラスタリングを行った。その結果、以下の3つの支援グループ、「活用者のナラティブを集める」、「活用シーンを増やす」、「ピアサポートのコミュニティをつくる」に分類することができた。本章では、それぞれの支援内容について、これまでの活動を紹介しながら、今後必要な支援について考察を行う。

4.1. 活用者のナラティブを集める

まず、「旅のことは」の活用の支援において、「活用者のナラティブを集める」ことが重要であると考えられる。活用者のナラティブというのは、複数の経験知や実践知から抽象化された「中空のことは」から、活用者自身やその人たちが知る人たちの経験に結びついた語りのことである。「旅のことは」は40の「ことは」の集まりであるが、それらに、1つ1つに個人が持つナラティブが紐付けられることで、その人のオリジナルの「ことは」となり、「旅のことは」が生き生きするようになり、その活用コミュニティも強くなる。パターン・ランゲージの提唱者であるクリストファー・アレグザンダーも以下のように述べている。

「社会や町の一人一人が、ランゲージの個別版を所有してはじめて、それが生き
たランゲージになる。」(Alexander, 1979, 邦訳p.270)

パターン・ランゲージは、作成をして終わりではなく、そこからランゲージを社会全体として育てて行くということが必要となる。その活用を支援するという点に関しても、活用者のナラティブが集まることで、ほかの人が活用するきっかけとなる。

現在、Facebook の「旅のことばをみんなで使おう！」に一部のナラティブが集まってきているが、より多くのナラティブを集めるための仕組みが必要であると考えられる。

4.2. 活用シーンを増やす

次に、「旅のことば」活用したい人が活用できるようになるために、「使われるシーンを増やす」支援が必要であると考えられる。

3章でも取り上げたが、新しい考えを先行して受け入れる「イノベーター」や「アーリーアダプター」とは異なり、社会の多数をしめる「アーリーマジョリティ」の人たちは、有効な先行事例をいくつか見てからでなければそのサーピスを取り入れない傾向がある。そして、その先行事例というのは、「アーリーマジョリティ」にとってのものなので、彼らと一緒にコラボをしてその事例をつくることが求められている (Moore, 1991)。

これまでの活動を振り返ると、「旅のことば」カードの作成は効果的で、ワークショップ型での活用のシーンが増えるきっかけとなった。RUN 伴の応援グッズとして旗のパターンオブジェクトになることで、新しい活用のシーンを増やした事例と言えるだろう。その他、川崎市が作成した「認知症アクションガイドブック (川崎市認知症ケアパス)」は、新しい活用シーンの1つであるといえ、今後、同様の活用シーンが増えて行くための支援にはどのようなものがあるのか考えて行く必要がある。

4.3. ピアサポートのコミュニティをつくる

そして、より多くの「旅のことば」を活用したい人が活用できるようになるために必要な支援として、活用者同士がサポートし合う、「ピアサポートのコミュニティをつくる」ことが求められている。

現在、Facebook の「旅のことばをみんなで使おう！」やオンライン通話サービスの zoom など、ピアサポートが起き始めている。活用事例や活用者がまだ少ない時期では、作成メンバーが中心となり活用方法を開発や活用のサポートをしてきたが、全国の様々な場で活用が増えつつあることで、活用者同士のピアサポートが可能になってきた。

徐々に作り手によるサポートを薄くしていきながら、ピアサポートが中心となるようにコミュニティを強くしていくことで、より多くの人たちが活用可能となると考えられる。このコミュニティをつくって行くには、活用者のナラティブを集めることや活用シーンを増やすことが必要で、パターンが作り手を離れ、個々人のものになって行くための支援であると考えられる。

5. おわりに

本論文では、医療・福祉現場のみならず、さまざまな場での活用され始めている「旅のことば」の活用が、さらに広がるために、活用したい人が活用できるようになるために必要な支援について研究を行った。本研究では、「旅のことば」というパターン・ランゲージの活用支援ということで、一貫して取り組んできたが、研究を進めていく中で、「ピアサポートの支援」、「活用シーンを増やす支援」、「活用者のナラティブを集める支援」というのは、他のパターン・ランゲージの活用も、同様に支援ができそうだと気づいた。今後の研究として、今回の研究で分類することができた3つの支援内容を軸に「旅のことば」の活用の支援を続けるとともに、他のパターン・ランゲージの支援における可能性についても、検証していきたい。

謝辞

本研究活動にサポートいただいた、株式会社クリエイティブシフトの正井美穂さん、阿部有里さんに感謝を申し上げます。また、本論文の執筆にあたり協力をいただいた、井庭崇研究室の鳥羽和輝さん、坂間菜未乃さん、森遥香さん、宗像このみさん、そして、シェパードを担当して下さった鷺崎弘宜さんに心から感謝を申し上げます。

参考文献

- Alexander, C., Ishikawa, S., Silverstein, M., Jacobson, M., Fiksdahl-King, I. & Angel, S. (1977) *A pattern language: towns, buildings, construction*. Oxford University Press. (クリストファー・アレグザンダー他, 『パターン・ランゲージ: 環境設計の手引』, 鹿島出版会, 1984)
- Alexander, C. (1979), *The Timeless Way of Building*, Oxford University Press, New York. (クリストファー・アレグザンダー, 『時を超えた建設の道』, 鹿島出版会, 1993)
- Iba, T., & Iba Laboratory. (2014). *Learning Patterns: A Pattern Language for Creative Learning*, CreativeShift Lab.
- Iba, T., and Isaku, T. (2016). Creating a Pattern Language for Creating Pattern Languages: 364 Patterns for Pattern Mining, Writing, and Symbolizing, *23rd Conference on Pattern Languages of Programs (PLoP2016)*.
- 井庭崇, & 岡田誠 (編著), 慶應義塾大学 井庭崇研究室, & 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ. (2015). 『旅のことば: 認知症とともによりよく生きるためのヒント』. 丸善株式会社.
- Iba, T., Okada, M., & Dementia Friendly Japan Initiative. (2015). *Words for a Journey: The Art of Being with Dementia*. CreativeShift.
- 井庭 崇, 岡田 誠, 金子 智紀, 田中 克明, 「認知症とともによりよく生きるための実践知の言語化」, 日本認知科学会 第 32 回大会, 2015, pp. 864-873.
- 井庭崇, & 岡田誠 (編著), 慶應義塾大学 井庭崇研究室, & 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ. (2017). 『旅程的關鍵字: 與認知障礙症共存的啟示』. 三聯.
- Iba, T., Okada, M., & Tomoki Kaneko (2017). Words for a Journey: Collaboration Toward Dementia Friendly Society, *32nd International Conference of Alzheimer's Disease International (ADI2017)*

- 井庭崇, & 梶原文生. (2016). 『プロジェクト・デザイン・パターン：企画・プロデュース・新規事業に携わる人のための企画のコツ 32』, 翔泳社.
- 井庭 崇, 中埜 博, 竹中 平蔵, 江渡 浩一郎, 中西 泰人, & 羽生田 栄一.(2013). 『パターン・ランゲージ: 創造的な未来をつくるための言語 (リアリティ・プラス)』, 慶應義塾大学出版会.
- Ide, Satoshi. (2016). 'Run Tomorrow' as a Social Activity Got Searching Dementia Friendly Community, *31st International Conference of Alzheimer's Disease International (ADI2016)*.
- 大城 勝史, (2017). 『認知症の私は「記憶より記録」』, 沖縄タイムス社
- Kaneko, T., & Iba, T. (2017). Patterns for Utilizing Patterns towards Dementia-Friendly Communities," in the *World Conference on Pursuit of Pattern Languages for Societal Change (PURPLSOC2017)*.
- Kaneko, T., Iba, T., & Okada M. (2017). Realizing Dementia Friendly Communities with "Words for a Journey", poster abstract, *32nd International Conference of Alzheimer's Disease International (ADI2017)*
- Kaneko, T., Yoshikawa, A., & Iba, T. (2016). Dementia Friendly Communities with a Pattern Language for Living Well with Dementia, *2016 International PUARL Conference (PUARL2016)*
- 厚生労働省. (2015). 『「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)」(本文)』
- 国際大学 グローバルコミュニケーション・センター, & 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ. (2015). 『認知症の人にやさしいまちづくりガイド: セクター・世代を超えて、取り組みを広げるためのヒント』, 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター.
- 佐藤 雅彦, (2014). 『認知症になった私が伝えたいこと』, 大月書店.
- 丹野 智文, (2017). 『丹野智文 笑顔で生きる』, 文藝春秋
- 中村 成信, (2011). 『ぼくが前を向いて歩く理由：事件、ピック病を抱えて、いまを生きる』, 中央法規出版.
- 樋口 直美, (2015). 『私の脳で起こったこと レビー小体型認知症からの復活』, ブックマン社
- Moore, G. A (1991), *Crossing the Chasm*, James Levine Communications, Inc. (川又政治訳『キャス ムーハイテクをブレイクさせる 超マーケティング理論』、翔泳社、2002。)
- Mori, H., Kimura, N., Ando, S., & Iba, T. (2016). Pattern Concierge: Using Push and Pull Patterns to Help Clients Design Their Future. *23th Pattern Languages of Programs (PLoP2016)*.

※本稿は、AsianPLoP2018 の Writers' Workshop にかけるバージョンであり、最終稿ではありません。

付録 1. パターン活用パターン

「パターン活用パターン」は、パターン・ランゲージをよりよく活用していくためのコツをまとめたパターンである。4つのカテゴリで構成されていて、計 12 のパターンがある (Kaneko & Iba, 2017)。このパターンは、「旅のことば」をより多くの人に活用してもらうために、筆者が作成したものである。

最初のカテゴリ「(A) Learn」は、《使っている世界》《先駆者から学ぶ》《使い方をつくる》からできている (表 1)。二つ目のカテゴリ「(B) Mind」は、《それぞれの捉え方》《対話の種》《変化は起きている》からできている (表 2)。三つ目のカテゴリ「(C) Action」は、《お気に入りからのスタート》《近場実験》《いつもの時間》からできている (表 3)。最後のカテゴリ「(D) Creation」は、《自分のやり方》《きっかけツール》《企画への埋め込み》からできている (表 4)。

これらのパターンを用いながら、パターン・コンシェルジュ (Mori *et al.*, 2016) として、対話を通じた「旅のことば」の活用のサポートを行っている。

(A) LEARN			
No.	パターン名	パターンイラスト	状況・問題・解決
A1	使っている世界		パターン・ランゲージを知り、活用しようと思っている。その状況において、自身の活動に取り入れたいと感じているが、どのように活用して良いかイメージが湧かず、実践に移せていない。そこで、実際にパターン・ランゲージを活用している場に参加し、使っている人たちとつながる中で、活用のイメージを掴む。
A2	先駆者から学ぶ		自身の活動にパターン・ランゲージを取り入れようとしている。その状況において、活用を始めたものの、思ったように活かしきれていない。そこで、すでに実践している人たちから、どのように自身の活動に活かしているのかを聞きながら、自分なりの活用方法を考える。
A3	使い方をつくる		自分の職場にパターン・ランゲージを取り入れたいと考えている。その状況において、自分に適した使い方に出会えていないことで、うまく使いこなさきれてない。そこで、まずは、すでにパターン・ランゲージを活用している人たちの使い方を真似してみ、自分なりの使い方をつくりながら学ぶ。

表 1: カテゴリ(A) LEARN のパターン一覧

(B) MIND

No.	パターン名	パターンイラスト	状況・問題・解決
B1	それぞれの捉え方		パターン・ランゲージを知り、活用しようと思っている。その状況において、正しい使い方があると思ってしまう、活用し始めることを難しく感じる。そこで、自分の悩みや課題を解決してくれるアイテムとして捉えてみる。
B2	対話の種		自身の活動にパターン・ランゲージを取り入れようとしている。その状況において、どのように自身の活動に活かして良いのか分からず、実践にまで至っていない。そこで、パターン・ランゲージを認知症の方や家族、そのサポートメンバーと一緒に活動するためのコミュニケーション・ツールとして気楽に捉えてみる。
B3	変化は起きている		自分の職場にパターン・ランゲージを取り入れたいと考えている。その状況において、どのような効果があるのかうまく説明しきれず、実践にたどり着けていない。そこで、その場で対話が生まれることや気づきが得られること自体が大きな変化であると捉える。

表 2: カテゴリー(B) MIND のパターン一覧

(C) ACTION			
No.	パターン名	パターンイラスト	状況・問題・解決
C1	お気に入りからのスタート		パターン・ランゲージを知り、活用しようと思っている。その状況において、パターン数が多く、どのパターンから活用すれば良いのかわからず、実践にたどり着けていない。そこで、自分の心に響いた・気に入ったことばから実践する。
C2	近場実験		自身の周りや活動にパターン・ランゲージを取り入れようとしている。その状況において、成功させようと自分に過度なプレッシャーをかけることで、活用を始めることができない。そこで、まずは、身近なところで試してみる。

C3	いつもの時間		<p>自分の職場にパターン・ランゲージを取り入れたいと考えている。その状況において、日々の業務が忙しく、参加して欲しい人や自分の時間がつくれない。そこで、何か新しいこととして始めるのではなく、普段の活動の中に取り入れてみる。</p>
----	--------	---	--

表3: カテゴリー(C) ACTION のパターン一覧

(D) CREATION			
No.	パターン名	パターンイラスト	状況・問題・解決
D1	自分のやり方		<p>パターン・ランゲージを知り、活用したいと思っている。その状況において、具体的な活用方法に囚われてしまっていて、自身の活動に上手く活かしきれていない。そこで、自身の活動の中でパターン・ランゲージを捉え、新しい活用方法を開発する。</p>
D2	きっかけツール		<p>自身の活動にパターン・ランゲージを取り入れようとしている。その状況において、地域の中で活かそうとするものの、具体的な企画まで落とし込むことができない。そこで、地域の中で認知症について考えるきっかけづくりとなる、パターン・ランゲージを使った対話の場を企画し、そこで出てきたアイデアをみんなで具体化・実現していくようにする。</p>
D3	企画への埋め込み		<p>自分の職場にパターン・ランゲージを取り入れたいと考えている。その状況において、活用方法は知っているものの、なかなか活かす機会がない。そこで、研修や講演依頼を、パターン・ランゲージを活用するという企画の形にすることで、より良い活用方法を作り出す。</p>

表4: カテゴリー(D) CREATION のパターン一覧